

---

# DETECTIVE BOYS

snow+

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DETECTIVE BOYS

### 【Nコード】

N8232A

### 【作者名】

snow+

### 【あらすじ】

とあるポスターを見、少年探偵団は探偵の大会に出ることにした。しかし大会場はつわもの揃いだ。探偵団は自分達に似ている、あるチームと色々な暗号を解いていく。少年探偵団は、大会で優勝出来るのか…？

## FILE 1：名探偵大会？

”キーンコンカンコン”

帝丹小学校のチャイムが鳴った。五限目が終わり、下校時間のチャイムだ。

帰り道では、いつもの五人が歩いている。

「今日もかったるかっただなー。早く休みが来てほしいぜ。」

「何言ってるんですか、元太君！授業中ずっと寝てたじゃないですか！」

「そうだよー！起こしても全然起きなかったもん！」

歩美・光彦・元太がの後ろには、コナンと哀が歩いている。いつも二列になって歩くのだ。

「平和だねえ…。まあコレが一番なんだけど…」

「…そうね。これで組織がいなかったら最高なんだけど…」

「あん？奴らは最近活動してねえーんだろ？」

コナンの言葉を受け、哀の足が止まった。

「……？！まさか…」

「…昨日ネットで見たのよ。舞原財閥の社長が殺されたの…。目撃者が、殺される二、三日前に、舞原家の前で黒のポルシェを見たのよ…」

「…ジンの車か。」

二人は再び歩き出しながら、話し始めた。コナンは両手をポケットに入れ、話を聞いている。

「ええ、多分ね。手掛りが一切なかったそうだから、ジンの仕業でしょうね…」

「…まあこないだ組織に接近したばかりだし、今回ののは首を突っ込まないでおくか…」

「…ええ。そうしておいた方が身のためよ。」

コナンと哀は先週、とあるホテルにジンが入って行くのを見掛け後

を追っていた。そのホテルの部屋で、ジンはお金と麻薬の取引きをしていたのだ。

危うく見付かるところだったが、FBI捜査官のジョディも追っていたので、ジンはFBIに追われていたと思い、コナンと哀はまのがれたのだ。

「しかし、あの有名な舞原財閥の社長が組織の一員だったとはな……。」

「…私も、どこかで見た顔だと思っていたのよ。有名な人でテレビにもよく出てたから、テレビで見たんだと思っていたんだけど……組織に関わっていたとは驚きだわ…。」

「組織のメンバーにも、お金持ちが必要ってワケか。まったく、どうもこいつも、組織の仲間が増えてきたもんだな…。」

言いかけると、コナンは誰かのランドセルにぶつかった。

「おいっ！急に止まんなよなっ！」

「あつわりいわりい！」

コナンが正面からぶつかったランドセルの主は、元太だった。元太たち三人は、電信柱に貼ってある一枚のポスターを見ていた。

「ん？何だよソレ？」

コナンもそのポスターに気付いた。哀がポスターの題を読みあげる。

「DETECTIVE CONVENTION…小学生たちのみんなへ……。」

このポスターは、小学生の探偵の大会のお知らせらしい。ポスターにはこう書かれている。

『DETECTIVE

CONVENTION』

小学生たちのみんなへ！

その小さな探偵さん！

この大会で、日頃の推理の成果を出してみないかい？

君は未来の名探偵かもしれない！！

参加は、小学一年生〜小学四年の五人組ならダレでもOK！

みんなの参加、待ってるよー!!」

歩美・光彦・元太の三人は、このポスターに釘付けになってしまった。

「ねえっ！これやってみようよ！」

「そうですね！僕達、刑事さん達にも一目置かれていますからっ！  
丁度五人いますし！」

「俺らのために出来た大会みてえーだよな！」

三人はやる気満々だった。三人はコナンと哀ももちろん参加するでしよと聞いてきた。

「俺も参加してえーのは山々なんだけどよ……」

そう。コナンと哀は、本当は小学生ではないのだから、規則違反になつてしまう。まあ見た目は誰がどう見ようと小学生なのだが…

「おい！俺たち大丈夫かよ…？」

コナンは小声で哀に耳打ちした。

「いいんじゃない？見た目は、小学生なんだし。」

「ハハハ…それもそうだ…。」

コナンと哀は、自分達はあまり推理せず、三人に任せようと思いい緒に参加することにした。

**FILE 1：名探偵大会？（後書き）**

探偵団の小説を頑張って書こうと思っています。  
暗号とか作るのが大変そうだ（汗）  
とりあえず頑張ろー！（爆）

## FILE 2：阿笠の同意

少年探偵団の五人は、下校途中に阿笠の家へ寄った。

歩美・光彦・元太の三人は、呼び鈴を鳴らすと阿笠の返事を待つことなく家に入った。

《おっじゃまつしまーす！》

三人は靴を脱ぎ、すぐさま阿笠の元へ駆け出す。その後にコナンと哀も続く。

「おー君たち、よく来たのお！」

阿笠は紅茶を飲みパソコンをいじっていたが、探偵団に気付くと立ち上がりお菓子を用意し始めた。

「なーなー、博士！」

「ん？何じゃ？」

お菓子の用意をしている阿笠に、カウンター越しに元太が声をかけた。

「これ見てくれよ！」

「ん？」

阿笠は元太から差し出された紙を受けとると読み始めた。

「えー、何なに…、探偵大会…かのう？」

阿笠は慣れない横文字を読んでみせた。すると、光彦と歩美が答えた。

「そうなんですよ！是非参加したいと思うんですけど、保護者の同意のハンコが必要なんです！」

「博士ー？ダメえ？」

阿笠は焦りながらお菓子を出す。

「まあまあこれでも食べて…。考えるからのお…」

三人はお菓子をパクパク食べ始めた。そんな三人を見、阿笠はコナンを手招きする。

「おい、新一！どうするんじゃないのか？」

「まっいいんじゃないの？あいつら本気みてーだしよ。」

「…誰かさんも楽しみにしているみたいよ…。」

哀はコナンを見てクスツと笑ってみせた。それならーと、阿笠はハ  
ンコを取りに行った。

「まあ、あいつらが参加したいもう一つの理由は、この優勝商品、  
パリ旅行券だろーがな。」

コナンが大会の紙の下の方を見、呆れながら言うと、哀は微笑して  
みせた。

「でもいいんじゃないの？彼等らしくて…。私、そういうの結構好  
きよ。」

「ハハハ…。まあ、いつでも暗号とか解いてくんだろ？あいつらに  
はいい頭の運動になるぜ。」

そうこうしているうちに、大会の日がきた。

## FILE2：阿笠の同意（後書き）

大会でのトリックやらなにやらを考えているんですけど、難しい…  
（汗）

更新日の間がだいぶあくと思われます；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8232a/>

---

DETECTIVE BOYS

2010年11月24日16時05分発行